

一第73編 舞邑、プリアタン^{*1}

既に四半世紀前のバリ島である。日中は強烈な日射が容赦なく照りつける盛夏であった。サヌールビーチのホテルの従業員からオートバイを借り、相乗りの妻と内陸の見知らぬ村を次から次へと訪ねて行った。そして辿り着いた舞の邑、プリアタン。

バリ・ガムラン音楽^{*2}とその舞踏の伝統を受け継ぐ、マンダラ一族が居を構える平和な村である。予約もなく運良くその一室に泊まることのでき

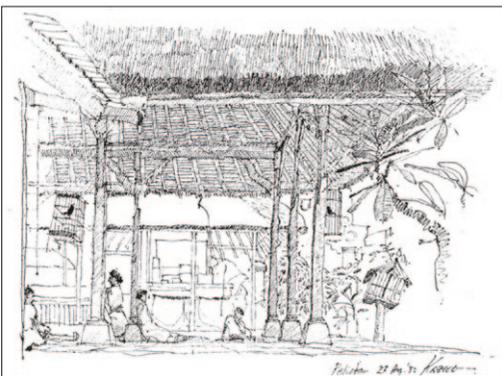
た。静まりかえった夜を熟睡すると、翌朝、太鼓の快い響きが聞こえてきた。今は亡き世界に名高いマンダラ翁が、舞台の上の娘たちにリズムをとる、毎朝のルーティンであった。そのうちガムラン打楽器群の響きも加わり、私達の仮の宿は不思議な音色とリズムの抑揚で、言いしれぬ安息感に包まれてゆく。村の少女等とともに、諸外国から集まった踊り子の卵達が打楽器のリズムに合わせ、腰を、腕を、指先をくねらす。その身体性が



写真73-1 プリアタンのコンパウンド

*1
Dasa Pelataran: バリ州ウブド郡のバリ舞踏が盛んな村

*2
Gamelan: バリ島に古くから伝承されている民族音楽



図版73-1 舞台上の休息

周辺の空間に生々しい生と性の息吹を生み出す。

方形の石貼りの舞台に、細身の木柱と茅葺きの屋根。いったい何人の娘たちがこの上で汗を流してきたことだろう。練習の合間に一休みする彼女たちに習って、大地と屋根の間を通り抜ける風と音色にひたすら身をまかせていると、いつしか生と死の境のない宇宙に突き抜けるような時間と空間が拡がっていった。こうして、私にとつて、この舞邑の開いたしつらえと人の営みが、住まい・建築の原点となった。

プリアタン

の周辺では、行く先々で村総出の結婚の祝い事、葬儀の茶毘に付される巨大な木馬の制作、森林の濃密な植相、みずみずしい田園風景や棚田（写真73-2）、竹細工の飾り物やお供え等々に遭遇した。それらは神道の装飾に通じ、そして一つ一つのものどもに神々が宿る。そこに忘れかけていたモンsoon・アジア^{*3}の原姿を見た。



写真73-2 バリの棚田

*3
Monsoon Asia: アジア東部から南東部南部に至るモンsoon（季節風）の影響を受ける地域